図書館だより Yぶらりー 横浜商業高等学校 2025年度 第5号

休み時間に下の階に行こうと階段を降りたら、生徒たちが立ち止まってじゃんけんをしていました。階段でじゃんけんといえば「グリコ」。勝ったときに出していた手がグーなら「ぐりこ」、チョキなら「ちよこれいと」、パーなら「ぱいなつぷる」と唱えながら階段を一歩ずつ進む、あの遊びです。楽しそうに階段を上り下りしている生徒たちを微笑ましく見ながら、これを題材にした小説があったことを思い出しました。青崎有吾『地雷グリコ』（ア 913.6 ア）は「本格ミステリ大賞」を受賞し「直木賞」の候補にもなった本で、高校生たちがグリコや百人一首、だるまさんがころんだ、やトランプなどを使って繰り広げる心理ゲームにドキドキさせられます。高校入試期間のお休みのおともにどうぞ。　　司　書

授業で作成した本の POP

商業科目「商品開発と流通」の授業で取り組んだ本の POP が図書館に彩りを与えてくれています。
いかにして本の魅力を伝えるかを考え、キャッチコピーを作り、イラストを添え、字体や紙にも工夫を凝らした作品が出来上がりました。小説ではないものが多く選ばれているのも、この取り組みの特徴かもしれません。
一冊の本を売り込むために、限られた紙面の中でどう魅せるのか、これまで授業で行ってきた学びが最大限に活かされています。POP を見てその本が読みたくなったら貸し出しカウンターまでどうぞ。



エッセイのおすすめ

I 先生の国語表現でエッセイを書くという単元に取り組むなか、エッセイとは、ということを知るために、図書館で授業が行われました。ちょうど本好きの商業科 T 先生が、くどうれいん『桃を煮るひと』（914 ク）というエッセイを読んでとても面白かったと聞いたばかりだったので、T 先生からこの本のおすすめポイントを教えてもらいました。

- 共感できる内容の言語化が上手
- 言葉遣いが秀逸
- 漢字とひらがなの使い分けがたのしい
- ひらがなが多くてやわらかい
- 情景描写が読者に伝わりやすい
- オノマトペの使い方が上手



このほかのおすすめエッセイとして授業の際に紹介した『のっけから失礼します』三浦しをん（914 ミ 文庫）にはＹ校が出てきます。５ページの短い「非実在野球人生」というタイトルの文章の中で、とある出版社の 40 代の女性編集者が「自分がプロ野球選手だったら、どの球団に入団し、どんな選手で、どういう野球人生を歩むのか」を妄想し、「私は横浜商業高校を卒業し、ドラフト３位で横浜ベイスターズに入団した、妻はずっと交際していたＹ校の同級生で、高校時代はレモンのハチミツ漬けとか作って応援してくれて……」と完璧にシミュレーションしたワンシーンにＹ校が登場してきます。このエッセイを見た野球部のＨくんが「自分もこんな妄想しますよ」と彼なりの楽しい妄想を聞かせてくれました。その内容は……皆さんの妄想におまかせします。

🕮 「百人一首占い」が 南センターに 🕮

文化祭で図書委員が企画し好評を得た「百人一首占い」が、１月２２日から２月５日まで南センターで掲示されました。割りばしでつくったくじを引き、出た数字の百人一首の札をめくると図書委員が考えた占いが書かれており、センターを訪れた方々がひととき楽しい時間を過ごせたようです。



図書館キャラの森本うさ子です



🕮 今月のおすすめ本 🕮

○『こころ Ｋとこなたの遺書』タカラッシュ（913 タ）

この本を国語のＮ先生に見せていただいたときに、なんて斬新な内容！と驚き、謎ときの好きな高校生にもぜひ挑戦してもらいたいと思ってＹ校図書館にも入れてみました。

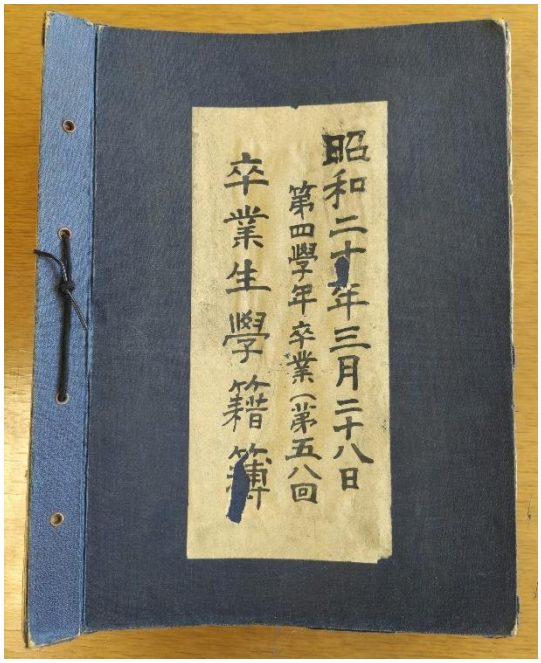
２年生の国語の教科書に載っている夏目漱石の「こころ」が、読者の解く謎によって新しい展開となっていきます。そして４種類の「こころ」の続きがあって、読者の選択次第で全く違うお話に生まれ変わります。夏目漱石の小説の続きなんて恐れ多い気もしますが、これはこれで楽しめます。

同じシリーズで、宮沢賢治の『注文の多い料理店』をオマージュした『謎（ちゅうもん）の多い料理店』タカラッシュ（913 タ）もあります。

Y校アーカイブ　vol. 34　「 卒業生學籍簿（昭和 20 年） 」

昭和20年3月28日に卒業した生徒の学籍簿です。第二次世界大戦真っ只中のY校生がどのような学びを行っていたのかを知る資料として、日本史研究の授業で活用しました。

厚地の表紙と裏表紙の間に綴られたB4サイズほど大きさの紙に、236名の卒業生の成績や出席状況、人物概評として性質・志操・素行・言語・動作・長所・短所・特技・趣味・運動・備考などを記入する欄があります。裏面には住所や本籍、出身校、家族関係、父兄の勤務先や身体検査の結果などが記載されています。



開校時より本科の修業年限は5年でしたが、昭和18年の中等学校令によって4年で卒業となっています。

昭和16・17年度の1・2年生時には英語の授業があり、読解に加えて会話も行われていましたが、昭和18年度には読解のみで会話の欄には評価がありません。昭和19年度となると授業そのものがなかったようで、学業の成績のところに「勤労動員作業成績」が貼られています。1日10時間という作業時間や「昭和特殊製鋼株式会社」「横浜ドッグ」「日本製粉」など動員された作業場所が記載され、その作業態度や出席日数などによる評価が第四学年の成績として残されています。英会話の評価は記載されていませんが、英語の授業そのものを行わない学校が多いなか、戦中にも英語教育があったという記録があるのは、そもそもY校は、この横浜の地に外国人と不自由なく商売で渡り合える人を、という福澤諭吉の思いをうけて設立された学校であったからこそ、と思われます。

